異世界でカフェを開店しました。4

甘沢林檎
Ringo Amasawa

RB
レジーナ文庫

登場人物紹介
オリヴィア
カフェの接客担当。ヴェルノという息子をもつシングルマザー。
好きな食べ物：肉じゃが
アラン
カフェの調理担当。お調子者で明るい、ワンコのような青年。
好きな食べ物：パンケーキ
ヘレナ
カフェの接客担当。従業員の中では一番若いが、しっかり者。
好きな食べ物：アイスクリーム
バジル
緑を司る妖精。契約相手のリサを「マスター」と呼び、いつもくっついている。
好きな食べ物：卵焼き
ウィルフレッド
海水浴場に現れた謎のイケメン。従者らしき男性と一緒にいるが、果たしてその正体は——？
好きな食べ物：焼きうどん
マリア
クリフ
ジーク
カフェの調理担当。元は騎士団にいた。リサにとっては公私ともにパートナーで、頼りになる存在。
好きな食べ物：プリン
海風亭の一家
ジェイミー
ナタリア
リサ（黒川理沙）
カフェ・おむすびの店長。異世界にトリップした元OL。地球のおいしい料理を広めるために日々奮闘中!
好きな食べ物：和食

目次

異世界でカフェを開店しました。4　7
ある少年たちの夏季休暇　267
書き下ろし番外編
ある魔術師の後援　335

異世界でカフェを開店しました。4

プロローグ

フェリフォミア王国の王都の一画。
中心部からは距離があり、すぐ隣の区画が歓楽街であるそこには、学生や単身者向けの安いアパルトマンや個人経営の小さな商店が立ち並んでいる。
ある程度の人通りはあるが、華やいだ感じや賑やかさはない。
そんな場所に、新たな店が出来ようとしていた。
レンガ調の壁に、人目を引く赤いドア。その横の壁には小窓。
それは、どこか既視感を覚える佇まいだった。
店内では開店準備をしているのか、騒がしい声や物音が外まで響いている。
その店の中から、一人の男が出てきた。
くすんだ茶色の髪を後ろに流して整髪剤で固め、鼻の下に蓄えた髭は綺麗に整えられている。

身に纏っているのは高級感のある三つ揃えの紳士服だ。財力を見せつけるかのように金の装飾があしらわれ、手や腕にも貴金属が飾られている。
このごく庶民的な場所に建つ店には、全く似つかわしくない男だった。
彼によって開け放たれたドアの向こうでは、多くの人々が動いている様が見て取れる。
男はまだ看板のない店の前に立ち、腕を組んで建物の全体を眺めた。
そして、満足気にニヤリと笑う。
その笑みは見るからに、下品で邪なものであった。

同じ頃、王都の道具街。
古い街並みに調和するようにひっそりと立つカフェ・おむすびには、今日も客がひっきりなしに訪れていた。
それもそのはず、王都に知らない人はいないと言われるほど有名な店だ。これまで食べたことがないくらいおいしい料理が食べられると評判である。
レンガ調の壁に、人目を引く赤いドア。右手にはガラスのショーケースがあり、その上には小窓があった。
ショーケースには色とりどりのケーキが並び、道行く人の目と心を楽しませている。

一人の客が赤いドアを開けて中に入ると、こぢんまりとした店内はたくさんの人で埋まっていた。

「いらっしゃいませ」

ショートカットの女性店員が、すかさず声をかけてくる。

そしてちょうど一人分だけ空いていたカウンター席に誘導し、メニューを手渡してきた。

「今日のランチメニューは、親子丼セットとグラタンセットの二種類です」

知らない料理名に戸惑う客に、女性店員は笑顔で説明してくれる。

その説明を聞いて、客はグラタンセットを頼むことにした。

女性店員が注文を聞いた後に出してくれた水を、客は一口飲む。ただの水かと思っていたが、爽やかな風味があって口の中がすっきりした。

どうやら柑橘類の果汁も少し入っているようだ。

しばらくすると、黒髪を一つに束ねた女性がお皿を持ってやってくる。ショートカットの女性とは違ったデザインの制服を着ていた。

「お待たせいたしました。グラタンのランチセットです。熱いので気を付けて召し上がってくださいね」

黒髪の女性店員はそう言いながら、お皿を客の目の前に置いた。

大きいお皿の上には、手前に熱々のグラタン、右奥には瑞々しいサラダ、左奥には小さい器に入ったスープが置かれ、小さい丸パンまでついている。

なんとも充実した一皿だ。

客はまず、メインのグラタンにスプーンを差し入れる。ぐつぐつと音が聞こえてきそうなほど焼きたてだ。

こんがりと焦げ目のついた表面を割って掬うと、香りが一層強くなった。

湯気の上がるそれに息を吹きかけ、冷ましてから頬張る。それでも咀嚼すると中から熱が噴き出てきて、客はハフハフしながら味わった。

濃厚なミルクの風味が口いっぱいに広がる。もちもちした食感のマカロニにソースがよく絡まっている。鳥肉や芋など他の具材もソースと絶妙にマッチしていて、おいしいという感想しかなかった。

一口食べてからは夢中で食べ進め、あっという間に平らげてしまう。あれだけボリュームがあったのに、お皿の上には何も残っていなかった。

支払いをした客は満足そうな表情を浮かべ、店を去っていく。

そして、また新たな客がやってきて、その空いた席を埋めるのだった。

第一章　みんなで行きましょう。

フェリフォミア王国最大の祭りである春の花祭りが終わり、王都の浮き足立った雰囲気も消えた。人々は落ち着いた日常を取り戻しつつある。

花祭りに屋台を出したカフェ・おむすびも、祭りの後に一日だけ臨時休業してから、通常の営業に戻った。

「そう言えばリサさん」

「んー？」

カフェの開店準備中、カウンターテーブルを拭いていた女性店員が、思い出したように口を開いた。

オレンジ色の髪をショートカットにした彼女は、ヘレナ・チェスター。カフェでは接客を担当しており、すらりとした体に、カフェの制服をスタイリッシュに纏っている。

一方、ショーケースに色とりどりのケーキを並べながら返事をしたのは、長い黒髪を一つに結んだ女性だ。彼女はリサ・クロカワ・クロード。カフェ・おむすびの店主で

ある。

フェリフォミア王国では珍しい黒髪と、黒に近い焦げ茶色の瞳を持つ彼女は、この国の出身ではない。

いや、そもそもこの世界のどの国の出身でもなかった。

彼女はこの世界の創造主である女神によって、違う世界から連れてこられた人間なのだ。

その事実は、彼女の養父母とカフェの従業員のみが知る秘密であった。

「花祭りのルルメールアリアでもらった副賞の使い道って決めたんですか？」

ヘレナの言ったルルメールアリアとは、花祭りの最終日に行われたベストカップルを決めるイベントのことだ。

リサはカフェのメンバーと、彼女が教鞭をとる国立魔術総合学院の料理科の生徒たちによって推薦され、恋人のジークと共にそのイベントに参加したのである。

結果、グランプリには選ばれなかったものの、カフェとして花祭りに大きく貢献したことが評価され、審査員特別賞に選ばれたのだった。

その際にもらった副賞は、旅行券。ヘレナはそれの使い道が気になっているようだ。

というのも、あと二ヶ月ほどで料理科の一年次が終わり、二ヶ月半の長い夏期休暇に

入る。そして、この国では同じ時期に、仕事をしている大人も二週間ほどの夏休みを取るのが一般的なのだ。

カフェ・おむすびも毎年夏は、二週間ほど休業している。

春祭りの最中はまだ肌寒かったが、最近は暖かな陽気の日が多く、季節は初夏へ移り変わろうとしていた。

そんな時期なので、そろそろ夏のバカンスの予定を立てようという人も多いはずだ。そのためヘレナも、この時期に副賞の旅行券を使うのではないかと考えたのだろう。

だがリサは、ヘレナに指摘されて初めて気付いたように、「ああ、そう言えば」と呟(つぶや)いた。

元の世界で社会人をしている頃は、二週間という長い期間休むことなどなかった。そのため、夏のバカンスという風習には未だになじめず、頭からすっかり抜け落ちてしまっていたのだ。

「旅行ね～」

リサは並べ終えて空(から)になったケーキのトレーを胸に抱え、中空を見つめて考え込む。

「早く決めて宿とか予約しないと、埋まっちゃいますよ～？」

「そうだよね。けど私、観光地とか全然知らないからな～」

「ジークさんに聞いたらいいんじゃないですか？」

「それが確実だね」

ヘレナに急(せ)かすように言われ、苦笑しながらリサは答えた。

ちょうどその時、カウンターの奥から一人の男性が出てきた。

「もしかして俺のこと呼びました？」

やってきたのはシルバーブロンドの髪に青い目をした青年だ。リサやヘレナとは微妙にデザインの違う制服を着ている彼は、ジーク・ブラウン。

カフェでは調理を担当していて、リサと同じく学院の料理科で講師も務めている。そして前述した通り、リサとは恋人同士でもあった。

「呼んだわけではないんだけど、ヘレナにルルメールアリアでもらった副賞をどう使うか聞かれてね。それでジークくんに相談しようと思ってさ」

リサの言葉を聞いて、ジークはなるほどといった風に頷(うなず)いた。いつもながら感情が顔に出ない彼だが、出会ってからかれこれ四年も経つと、何を考えているかくらいはリサにもわかるようになっていた。

「旅行券ですか。……あ、少し思いついたことが……」

「ん？　なになに？」

「ちょうど賄いが出来たんで、食べながら話しますよ。みんなにも聞いてほしいし」
何か考えがあるらしいジーク。
リサとヘレナはお互いに顔を見合わせた。

カフェ・おむすびの二階はプライベートスペースになっている。
かつてこの建物を使っていた店の主人が、住居として使用していたらしい。今はカフェのスタッフが着替えたり、賄いを食べたりするスペースとして、また備品倉庫としても活用していた。
その二階のダイニングテーブルに、カフェ・おむすびのメンバーが勢ぞろいしていた。
お誕生日席にリサ、その右隣にジーク、左隣にはヘレナが着席している。
そしてジークの横には、ふわふわしたうぐいす色の髪が特徴的な青年が座っていた。
彼はアラン・トレイル。リサやジークと同じく調理を担当している。
彼はテーブルの上に並べられた賄いを前にして、ご飯を待ちきれない犬のようにそわそわしていた。
アランの向かい側に座っているのは、ミルクティー色の長い髪を一つにまとめ、たれ目がちの目が印象的な女性だった。

彼女はオリヴィア・シャーレイン。ヘレナと一緒に接客を担当するスタッフだ。
カフェのメンバーの中では一番年上で子供がいることもあってか、みんなの良きお姉さん的な人物である。
余談ではあるが、彼女はかなり豊かな胸の持ち主で、ヘレナが羨ましそうに見ていることが多々あった。
そして最後に、カフェのメンバーではないが、リサの肩にちょこんと座る人影がある。二十センチほどの体に緑色のワンピースを纏い、それよりやや明るい緑色の髪をした女の子。
彼女はバジルといい、リサと契約している精霊だ。
本来精霊は食事を必要としないが彼女は例外らしく、かなりの食いしん坊。アランと同じように賄い料理を早く食べたくて、リサの肩から若干身を乗り出している。
ただ、そんな彼女の姿はリサにしか見えていない。
「じゃあ全員揃ったところで、いただきます！」
「いただきます！」
リサの言葉に続き、全員が唱和して食事が始まった。
開店準備が終わったら、全員で賄いを食べるのが毎日の習慣なのだ。

「わあ、今日の賄いは凝ってるわねぇ」
オリヴィアがメインの料理を見て楽しそうな声を上げた。
「あ、それは俺が作ったんです！　……といっても、考えたのはリサさんですけど」
アランは得意げに言った後、気まずそうに笑って頭を掻いた。
今日の賄いのメインは、トマトによく似たマローという野菜を使ったグラタン。
マローの中身をくりぬいて器にし、丸ごと使っているので食べ応えも充分だ。少し焦げ目のついたチーズが食欲をそそる。
「昨日のランチで使ったホワイトソースが余ってたから、それを使ったんだよね」
リサがそう補足した。
「この魚も、臭みが全然なくておいしい！」
もぐもぐと咀嚼しながらヘレナが絶賛したのは、白身魚の香草焼き。下味をつけた魚にハーブをまぶして、じっくり焼き上げた逸品だ。ハーブの香りで魚特有の臭みが消されている。
「それはジークさんが作ったんですよ」
「さすがジークさん！」
アランの言葉を聞いたヘレナはジークを見るが、彼はクールな表情のまま、シャキ

シャキとサラダを頬張っていた。
今日のサラダは、さっぱりとした海藻のサラダだ。ミズウリというキュウリに似た野菜が入っているので、食感も抜群である。
リサは和気藹々としたメンバーの様子を微笑ましく眺めながら、スープを一口飲んだ。スープは塩味のあっさりした野菜スープ。グラタンと香草焼きの味が濃い目なので、スープで口直し出来るようにしたのだ。
そのリサのすぐ横では、精霊のバジルが大きな口を開け、彼女の身長とほぼ同じサイズのパンに齧りついていた。
外はパリパリ、中はふんわりのクロワッサンだ。パンはいつもヘレナの実家であるチェスターパン店から卸してもらっている。
この世界特有のカチコチパンしか作れなかったヘレナの父・ポールも、リサの指導によってメキメキと腕を上げた。たまにリサに助言をもらいにくるが、今ではリサよりも腕前は上だ。
そのおかげか、代々続いてきた歴史ある店も、かつてないほど繁盛しているらしい。
バジルは頬にパンくずをつけたまま、クロワッサンをおいしそうに頬張っている。彼女の小さな体のどこに消えているのかはわからないが、クロワッサンは既に三分の一が

なくなっていた。
この場で唯一バジルの姿を見ることが出来るリサは、一人引きつった笑みを浮かべる。
リサの視線に気付いたのか、バジルが食べるのをやめて見上げてくる。
「マスター、どうしたんですか？」
不思議そうな表情のバジルに、リサは頭を振ってみせた。
「何でもないよ」
そう言って、バジルの頬についたパンくずを指で取ってあげる。バジルは「ありがとうございます！」と言い、再びクロワッサンにかぶりついた。
リサは余計なことは考えないことにして、自分も食事を進める。
「そう言えばジークさん、さっき言ってた『思いついたこと』ってなんですか？」
ヘレナが思い出したようにジークに問いかけた。
「さっきの話ってなんのこと？」
その場にいなかったオリヴィアが首を傾げた。アランも同様に不思議そうにしている。
「さっきね、ルルメールアリアでもらった副賞をどう使うかって話をしてたんだ」
リサが二人に説明すると、彼女たちはああ、と頷く。
「リサさん、まだ使い道を考えてなかったらしいんですよ。それでジークさんに聞いたら、何か考えがあるみたいで」

ヘレナがそう言ったので、全員の視線がジークに向けられた。
彼は口の中のものを呑み込んでから話し始める。
「その旅行券を使って、カフェのメンバー全員で旅行に行くというのはどうだろうか？」
ジークの言葉に、他の四人はキョトンとする。
ややあって、オリヴィアが口を開いた。
「全員でって……それはリサさんとジークくんがもらった物でしょう？」
「そうっすよ！　お二人で旅行した方がいいんじゃないですか？」
アランもオリヴィアに同調して言う。
だが一人、ジークの提案に飛びついたのはリサだった。
「それいいかも！」
明るい声を上げたリサに、ジークは一つ頷いてみせてから、再び口を開く。
「そもそも俺たちがルルメールアリアに出られたのは、みんなが推薦してくれたからだ。それに特別賞をもらえたのも、カフェの全員で祭りに貢献したからだと思う」
ジークの説明を聞きながら、リサはうんうんと首を縦に振った。
一方、他の三人はやや困ったような表情を浮かべる。その顔からはリサとジークの邪

魔になるのではないかという配慮が窺えた。
そんな三人に、リサは笑顔で提案する。
「私の世界には慰安旅行といって、働いている人たちを労うために、会社が旅行に連れていくっていう習慣があるんだ。今回のもそれと同じで、私から日頃頑張っているみんなへの、せめてものお礼と思ってもらえたら嬉しいな。花祭りでも頑張ってくれたしね！」
リサがそう言うと、ヘレナとアランは表情を緩めて頷いた。
だが二人と違い、オリヴィアの顔は困惑したままだった。
「あの、リサさん」
「どうしたの？　オリヴィア」
「お話はすごく嬉しいんですけど、私には息子がいるから……」
「もちろんヴェルノくんにも参加してもらうに決まってるから！」
シングルマザーのオリヴィアは、今年七歳になる息子のヴェルノを残して旅行に行くわけにはいかず、断ろうと思っていたようだ。
だがリサは最初からヴェルノも連れていくつもりだったので、全く問題なかった。
リサの言葉を聞いてほっとしたのか、オリヴィアにも笑顔が戻る。

そして彼女は、早くもヘレナと二人で旅行話に花を咲かせ始めた。
流行に敏感で、人気の観光地にも詳しいヘレナとオリヴィアを中心に行き先を決めることにする。
「みんなで楽しめるところとなると……悩みますね～」
ヘレナが腕を組んで、うーんと唸る。
「そうねぇ、旅先で何をするかによっても変わってくるし」
オリヴィアも頬に手を当てて悩み出す。
そんな二人を眺めながら、リサがポツリと零した。
「こっちの世界の人って、夏に海水浴とかしないの？」
それを聞いて、ヘレナとオリヴィアが同時にリサを見る。
「良いですね！　海水浴！」
「そうね！　なかなか出来ないことだし、夏にぴったりでいいんじゃないかしら」
二人は明るい表情で声を弾ませた。
「海水浴となると、やっぱり隣国のスーザノウルかしらね？」
オリヴィアが候補地を挙げると、ヘレナも同意する。
「そうですね、ちょっと遠くなっちゃいますけど」

一方、それを聞いたリサは首を傾げた。
「あれ？　この国も海に面してるよね？　それなのに、なんでわざわざ隣の国に行くの？」
食材を仕入れる関係で、海産物がとれる港町の名前をいくつか知っているリサは、疑問に思ったのだ。
「ああ、それはですね。フェリフォミア王国にも海はありますが、海岸は岩場が多くて海水浴には向かないんです。スーザノウルは砂浜が多いので、海水浴場がたくさんあるんですよ」
「なるほど～」
ヘレナの説明に、リサは納得した。
「リサさん、隣国となると旅費が嵩んでしまいますけど、大丈夫ですか？」
オリヴィアが心配そうな面持ちでリサに尋ねた。
カフェのメンバーの中では唯一自らが家計を切り盛りしている彼女だからこそ、そういった現実的な問題がすぐさま頭に浮かんだのだろう。
ただでさえ従業員ではない息子を同行させてもらうこともあり、費用の面でリサに負担をかけてしまうことを彼女は危惧していた。

「何かあった時のために貯めていた資金もあるから、そこは心配しないで！　私の思いつきで始めた花祭りの屋台でみんながすごく頑張ってくれたから、そのお礼だと思って楽しんでよ。ね？」
リサが安心させるように笑顔で言ったので、オリヴィアは幾分か安堵する。
それでも、なるべくお金がかからないプランを考えようと、こっそり決意した。
カフェの開店時間が近づいてきたこともあり、慰安旅行の話はそこで切り上げ、メンバーは一階に向かうのだった。

第二章　期待が膨らみます。

慰安旅行の準備は、ヘレナとオリヴィアが中心となって進めていった。旅行先が国外であるため、出国の手続きもしなければならない。その関係で日程を最初に決め、役所への届け出も早々に行う。
旅行に行くのは二ヶ月以上も先だが、徐々に現実味を増していく旅行計画に、カフェのメンバーはどこか浮足立っていた。

そんな中、カフェ・おむすびに災難ともいえる出来事が近づきつつあった。
それは、花祭りから一週間ほど経った頃のこと。
「こんにちは～」
「アンジェリカ、いらっしゃい」
お昼のピークが過ぎるのを見計らってやってきたらしい女性客の声を聞き、カウンター内にいたリサはカップをしまう手を止め、顔を上げた。
ボリュームのある蜂蜜色の髪をポニーテールにし、ワンピースの上に臙脂色のエプロンをつけた彼女の名は、アンジェリカ・サイラス。
カフェの隣に立つサイラス魔術具店の看板娘であり、こうしてたびたびカフェに休憩しにやってくる常連客だ。
最近はあまりないが、開店当初はたまに手伝ってくれていたこともあり、カフェのメンバーにとっては頭が上がらない存在でもあった。
アンジェリカはリサに気付くと、カウンターの空いている席にいそいそと座る。
「リサ！　今日はこっちにいるんだ」
「うん、今日は午前の授業だけ担当だったから」
カフェと料理科の講師を掛け持ちしているリサだが、今日は朝一の授業のみ担当だったので、昼からはカフェの仕事に勤しんでいた。その代わり、今はジークが学院で教えている。
「アンジェリカこそ、店番はいいの？」
いつもカフェに来る時は外しているエプロンを今日はつけたままだということに気付いたリサが、アンジェリカに問う。
「ああ、ちょっとだけ抜け出して来たの」
アンジェリカはそう言うと、お茶だけを注文した。
リサはカウンター内で手早くお茶を淹れて、彼女の前に差し出す。
「今日はどうしたの？」
カップに口を付けたアンジェリカに、リサが聞いた。アンジェリカはお茶を一口飲んでから、カップを置いてリサを見上げる。
「二十四区に新しいお店が出来たの知ってる？」
「そうなの？　あのあたりは行く機会がなかなかないから、あまり詳しくないんだ」
フェリフォミア王国の王都は、複数の区に分かれている。
それぞれの区には番号が付けられており、王宮に近い地区ほど番号が小さく、遠い地区ほど大きい番号が付いていた。

ちなみにカフェ・おむすびのある道具街は、八区。王宮が出来たのとほぼ同じ時期からあるので、道具街自体の歴史が古い。そのため昔ながらの職人さんが多く、老舗と呼ばれる店がたくさんあるのだ。

その道具街からかなり離れたところに位置する二十四区。そんな地区の新店情報を知っているとは、さすが情報通のアンジェリカだなとリサは感心した。

「なんかね、お店の名前が『カフェ・お米』っていうらしいよ」

「え？」

「びっくりでしょ？　この店と同じカフェなんだって！」

「いや、そっちじゃなくて……」

リサが驚いたのは、店名の『お米』という部分だ。

この世界で初めてお米を料理に活用したのはリサだ。それから四年ほど経ち、今では一般にも流通している。最近は精米業者もおり、家庭でもお米を食べられるようになった。

カフェ・おむすびのメニューの中でも、おむすびやオムライス、丼物など、お米を使った料理は人気がある。

とはいえ、パン食の習慣が根強いことと、お米はパンと違って炊く必要があることから、まだまだ広く知られていないのが現状だ。

そんな中、『お米』という名のお店が出来た。

これはもしかしたら、自分が異世界の食文化の発展という目標を掲げて行ってきたことが、一つの形になったのではないかとリサは考えたのだ。

「その『カフェ・お米』ってどんなお店なの!?」

興味津々な様子で食い付いてきたリサに、アンジェリカはややたじろいだ。けれど、すぐさま気を取り直し、自分の持っている情報を話し始める。

「私も聞いた話なんだけど、三日くらい前に開店したらしいよ。でね……」

アンジェリカはもったいぶるように一度言葉を止める。

リサは彼女をじっと見つめて続きを待った。すると――

「接客係が全員男性で、みんなすっごくカッコいいんだって!!」

そう言って、アンジェリカは目を輝かせた。

一方、彼女の言葉を期待して待っていたリサは、肩透かしを食らってしまう。

そのリアクションの薄さにあれ？　と思ったのか、テンションが上がっていたアンジェリカは、キョトンとした顔でリサを見た。

「驚かないの？」

「いや、もっとすごいことかと思ってたからさ……」
「えー？　今までそういうお店ってなかったし、充分驚くことだと思ったんだけど」
「そうなの？」
「うん、私が知ってる限りはね。あ、高級店なら別だと思うけど、気軽に入れるお店で制服着た男の人が給仕してくれるのも珍しいと思うよ」
リサもカフェの店主としてリサーチがてら、いくつかの飲食店に行ったことがある。その多くが昼は食堂、夜は大衆居酒屋のようなスタイルをとっていた。
接客するのは女性の店員がほとんどだ。男性の店員もいるにはいるが、店主兼料理人の親父だったり、家業を手伝っている息子だったりする。当然、そういう店は制服もない。
しかしアンジェリカによれば、その『カフェ・お米』は違うらしい。制服を着た「接客係」の男性が何人もいて、丁寧かつにこやかに接客してくれるという。
もっとも彼女も直接見たわけではないので、本当のところはわからない。
それでも、リサが関心を抱くには充分だった。
容姿の良い店員で客を集めるやり方はもちろんある。
思えば、元いた世界でも店員がイケメンということで話題になるお店はあったし、執事喫茶など、それを売りにしたお店だってあった。
現にカフェ・おむすびでもジーク目当てに来店する女性客がいるし、ヘレナやオリヴィアが男性客から気に入られることもたびたびある。
けれども、見目の良い店員がいるだけでお店を続けていけるとは到底思えない。
『カフェ・お米』はどんな料理を出すのだろうかと、アンジェリカの話を聞きながら、リサは想像を膨らませた。

第三章　不本意な噂が流れました。

アンジェリカから『カフェ・お米』の話を聞いた数日後のこと。
「リサさん、ちょっといいですか？」
学院からの帰りがけにカフェに寄ったリサに、閉店後の片付けをしていたヘレナが声をかけてきた。
「どうしたの？」
「お客さんが気になることを言っていたので……」

顔を曇らせるヘレナを見て、リサはあまり良いことではなさそうだと感じる。
「二十四区に出来た『カフェ・お米』というお店、知ってますか？」
「うん、アンジェリカから聞いただけだけど、店員さんがすごくカッコいいらしいね」
「そうみたいですね。でも、気になるのはそこじゃなくて……そのお店、うちとメニューがほとんど一緒らしいんです」
「え……？」
「日替わりのランチはやってないみたいですけど、ケーキのラインナップとかが、ほぼ同じらしくて……。それに店内の様子とかも、どことなく似てるんですって」
ヘレナの困惑気味な表情の理由がわかると同時に、リサもなんとも言えない気持ちになる。
今の話を聞くだけでも、その『カフェ・お米』がいろんな部分でカフェ・おむすびを意識しているのがわかる。
というのも、王都ですらケーキを売っているお店はまだまだ少ない。一部の高級レストランがデザートとして取り入れていたり、パン屋さんに少し置いてあったりする程度だ。
何しろケーキ作りには、特殊な道具や技術が必要になる。

その上、販売するには冷蔵保管しなければならないし、日持ちもしないので、設備面のコストがかかってしまうのだ。
それなのにわざわざケーキを販売し、さらにラインナップをカフェ・おむすびとほぼ一緒にしているというのは、作為的なものを感じざるを得ない。
カフェ・おむすびのレシピはアシュリー商会を通じて販売しているので、素人でも作れないことはない。けれど、カフェ・おむすびと同じクオリティで出すのは難しいはずだ。
そこまで頭を巡らせて、リサはハッと気付いた。
だからカッコいい店員が必要なのかと。
料理がそこそこでも、他に売りがあれば人々の注目が集まる。元の世界の飲食店も、趣向を凝らした内装にしたり、ショーを行ったりと様々な工夫をしていた。
まだ、その店の料理がどの程度のものかはわからない。だが、いずれこのカフェ・おむすびに何かしら影響してくるのではないかと、リサは漠然と思った。
リサのその懸念は、当たることになった。
――『カフェ・お米』はカフェ・おむすびの二号店らしい。

そんな噂が王都で流れ始めたのだ。

知らせてくれたのは、またしてもアンジェリカだった。

「信じられない！　私も偵察がてら行ってみたけど、確かに店員さんはカッコよかったよ！　でもあのお店のケーキ、形はここのと似てたけど、ただ甘いだけで全然おいしくなかったし！」

憤りながら話すアンジェリカの話を、リサは苦い思いで聞いていた。

リサがアシュリー商会を通じて販売しているレシピを使ってもらうのは自由だ。けれど、それをお金儲けに利用されると複雑な気持ちになる。

ケーキのラインナップが同じというだけでなく形まで似せているところから、カフェ・おむすびの名前を利用しようとしていることが窺えた。

アンジェリカは口直しをするかのようにカフェ・おむすびのミルクレープを平らげる。そして一通りの情報を話し終えると、すっきりした面持ちで帰っていった。

それを皮切りにして、お客さんの中から『カフェ・お米』に行ったという人がちらほら出てくる。

流行に敏感な女性や、カフェ・おむすびの噂を聞いて他国からやってきた人が多かった。

なぜ他国の人が出来たばかりの『カフェ・お米』を知っているのか、はじめは疑問だった。だが、その店があるエリアは王都の端の方であり、ちょうど他国から王都にやってくる人たちが通るルート上にあると聞いて納得した。

彼らが王都に入ってすぐに『カフェ・お米』がカフェ・おむすびの二号店だという話を聞いたとなると、噂がかなり広まっていることが窺えた。

「うーん……どうしたもんでしょうか」

カフェの閉店後、アランが腕組みをして、ため息まじりに呟く。

リサは苦笑するしかない。

片付けをしながらも、メンバーは後味の悪い気持ちを抱えていた。

翌日の、お昼を少し過ぎた頃。アシュリー商会の仕入れ担当者が納品に来ていたため、リサが厨房を離れていた時のことだった。

「ちょっと君！　店長を呼んでくれないか！」

オリヴィアが、ある客に突然そう言われた。

「何か不手際がありましたでしょうか？」

オリヴィアは事を荒立てぬよう、慎重に問いかける。

その中年の男性客は怒ってはいないようだが、真剣な表情を崩さず、オリヴィアの言葉に首を振った。

「いや、そうではないが……一言物申したいのだよ！　店長が無理なら他の料理人でもいいから呼んでほしい！」

頑なに言われて、オリヴィアは困ってしまった。少し離れたところにいるヘレナに助けを求めて視線を送ると、彼女も困惑した表情を浮かべている。

自分の手には負えないと判断したオリヴィアは、男性客にお辞儀をして厨房へ向かった。

だが、生憎リサの姿は見えない。

「アランくん、リサさんは？」

一人、厨房内で作業をするアランに彼女の行方を問う。

「リサさんなら、アシュリー商会の納品が来たんで裏口っすよ。新しく発注するものについての相談があるから時間かかるらしいです」

その言葉を聞き、オリヴィアはどうしようかと悩んだ。しかしリサがいないとなると、頼れるのは目の前のアランしかいない。

「アランくん、忙しい中悪いんだけど、お客さんがどうしても料理人と話したいみたいで……」

「あー、それ悪い方の話っすか……？」

カフェ・おむすびでは、料理のあまりのおいしさに感激し、料理人に礼を言いたがる客がたまにいる。

おいしいと褒めてもらえるのは料理人冥利に尽きるし、問題はない。

まあ、客の中には「うちの専属料理人になってくれ！」などと言い出す困った人もいないわけではないが、たいていは穏便に済む。

しかし、客商売をしていると何かしら文句をつけてくる客もいるもので、ヘレナとオリヴィアでは解決できず、店長や料理人が出向かなければならない場面がある。

ほとんどの場合はリサやジークが出るのだが、二人がいない場合はアランが対応することになっていた。

アランはオリヴィアの困惑した表情から、今回呼ばれた理由が後者であることを察したようだ。

「お客さん、怒ってはいないんだけど……」

申し訳なさそうに言うオリヴィアを見て、覚悟を決めたアランは、それまでしていた作業を中断して厨房を出た。

「お待たせしました。料理担当のアラン・トレイルです。何かお口に合わないものでもありましたでしょうか？」

オリヴィアに案内され、その客のところへ向かったアランが声をかけた。

話しかけられた男性客は、アランの顔と格好を見て納得したのか一つ頷いてから口を開く。

「いや、すごくおいしかったよ。特に、このシュークリームは絶品だった！」

文句を言われるのではと身構えていたアランは、褒められて肩透かしを食らった気分だった。

しかし、おいしいと言いながらも満足していない男性客の様子を不思議に思う。

すると、男性客は堰を切ったように話し出した。

「あっちの店でもシュークリームを食べたが、全く違っていた！　その時は確かにおいしいと感じて、わざわざフェリフォミアに来た甲斐があったと思ったが、こっちの店の方が断然おいしいじゃないか！　生地の表面はサクッとしていながら、中はふわっとしているし、クリームも濃厚で滑らかだ。どうして二号店とこうまで違うのかね！　同じ店なんだろう!?」

その言葉に、アランとオリヴィアはぽかんとした。

男性客のマシンガントークは止まらない。

「元々この店に来る予定だったが、王都に入ってすぐの場所に二号店が出来たと聞いたんだよ。宿に向かう途中にあったから、昨日行ってみたんだ。はじめは驚いたよ。料理名は聞いたことのないものばかりだし、周りの客は見たことのない料理を食べているし。料理の味も噂通りだと思った。二号店ではショートケーキというものを頼んだが、甘くて柔らかな食感のお菓子など初めて食べたよ」

「は、はあ……」

アランが気圧されたように相槌を打つも、彼の勢いは止まらない。

「けれど、この店に来てさらに驚いた！　外から見えるガラスのケースには、もっといろんな種類のケーキがあるじゃないか！　こっちは食事のメニューもあるようだし。何より、接客が格段に私好みだ。二号店の方も悪くはないが、店員がやたら見目の良い男ばかりで、女性に愛想を振りまいているような感じがした。それに、料理のレベルも全然違う！　私はその道のプロではないが、いろんな国に行っている分、人より多くの料理を食べてきたつもりだ。いや、そうでなくともわかるくらいの差が二つの店にはある。これはどういうことなんだ!?　二号店ならば、この店と同じくらいのレベルの料理を出すべきではないのかね!!」

一通り語り終えた男性客は、興奮で顔を真っ赤にしていた。
一方、話を聞いたアランとオリヴィアは複雑な心境だった。
男性客はカフェ・おむすびを高く評価してくれている。それは、とても喜ばしいことだ。
だからこそ二号店だと聞いた『カフェ・お米』の状況を嘆かわしく思い、わざわざこうして話してくれたのだと思う。
しかし実際のところ、カフェ・おむすびと『カフェ・お米』には何の関係もない。
アランとオリヴィアは目を合わせ、その事実を男性客にどう伝えようかと考える。
男性客は、黙ったままの二人を訝しく思ったようだ。
「君たち、聞いてるのか？」
と、やや不機嫌そうな声を上げる。
そこでアランが意を決して口を開いた。
「当店の料理を高く評価していただき、ありがとうございます。ただですね、当店はこの一店舗だけで、二号店はありません」
アランは男性客の勘違いを真っ向から否定した。
だが、彼はアランの言葉の意味が理解できなかったのか、キョトンとする。

「何を言ってるんだ？」
「おそらく『カフェ・お米』というお店に行かれたのだと思いますが、そのお店は当店の二号店ではありません。全く関わりのない店です」
同じことを繰り返し言われてようやく理解できたらしい男性客は、信じられないとばかりに口をぽかんと開けた。
「本当に？」
「はい、何の関係もないです」
アランにきっぱり言われて、男性客は一旦赤みの引いた顔を再びじわじわと赤らめ、慌てて謝罪した。
「申し訳ない！　そう聞いていたもんだから……」
アランもオリヴィアも怒りはしていない。カフェ・おむすびの料理をおいしいと感じ、気に入ってくれたからこその行動だと理解できるので、むしろ感謝している。
それに、普通の客にも違いがはっきりわかるほど、『カフェ・お米』の料理のレベルが低いというのを、直に教えてくれたのだ。
その後、羞恥のあまり小さくなりながらお会計をした男性客を、アランとオリヴィアは笑顔で見送ったのだった。

そして閉店後、業者への対応のために外していたリサと、料理科の授業を終えてやってきたジークに、アランとオリヴィアが詳細を報告した。

「やはり、こちらも何かしらの対応を考えた方がいいんじゃないですか？」

二人が話し終えたところで、少し離れたところから一部始終を見ていたヘレナが言った。

それを聞いて、リサはどうしたものかと悩む。

今日のようなことは今後も起きると予想された。それほど、『カフェ・お米』がカフェ・おむすびの二号店だという噂は広まっている。

今回の男性客のように直接意見を言ってくれる人はまだ良い。なぜならその際に『カフェ・お米』がカフェ・おむすびの二号店でないと伝えることができるからだ。むしろ、その噂を誰にも否定されることなく真実だと思い込まれる方が問題である。

今はまだ、客の入りなどに大きな影響は出ていない。けれども、今後どうなるかはわからなかった。

「そうだね。故意なのかどうかはまだわからないけど、そのお店がうちの名前を利用している感じはするし……まずは詳しい情報を集めなきゃね」

リサがそう言うと、話を聞いていた四人は頷く。

「相手がどうあれ、俺たちに疚しいところは全くないし、普段通りおいしい料理を提供することは忘れないでおこう」

ジークが話を締めくくるように言い、各々が気持ちを引き締めた。

第四章　まずは情報収集です。

その日以降、カフェのメンバーは『カフェ・お米』の情報を集め始めた。

まずリサは、中央広場で毎朝開かれているマーケットで食材を購入がてら、顔見知りの人たちから話を聞くことにする。

マーケットには色々な商店を営む人が、商品を積んだリアカーを手で押したり、馬に牽かせたりしてやってくる。

ほとんどが個人で経営している小規模な商店の人たちだ。

けれど価格が安く、新鮮なものが多い。また小規模だからこそ、広く流通していない珍しい食材が売られていたりもする。だから飲食店を営む人や主婦たちが、それらを求

めて集まって来るのだ。
リサも同様で、カフェの開店当初から食材を買いに来ており、今では多くの店主と顔見知りになっている。
そして人が集うということは、それだけいろんな噂も集まってくるということ。
まずリサは、よく利用している果物店を訪ねた。
「おはようございます」
「あら～、リサちゃんいらっしゃい！」
店員の小柄なおばさんが、リサに気付いてにっこりする。
リサは今日のオススメを聞きながら、目ぼしい果物をいくつか選んでいく。その間もおしゃべり好きなおばさんが、世間話をしてくれるのだ。
「あ、そう言えばリサちゃん。あのお店の関係者らしい人を、最近ちょくちょく見かけるわよ」
「マーケットにも来てるんですか？」
彼女には以前来た時に、『カフェ・お米』がカフェ・おむすびの二号店という噂は全くのガセだと話していた。
「うん、それっぽい人がね。若い男の子だったわ。あれが例のカッコいい店員さんって

やつかしら？　うちの店にも一度来てねぇ、カフェ・おむすびの店長は何を買って行ったかって聞かれたの！　二号店じゃないって知らなかったら、うっかりしゃべっちゃうところだったわ」
なんと、あちらの店員も、マーケットを利用してカフェ・おむすびの情報を集めているらしい。
この店のおばさんはおしゃべり好きではあるが、お得意さんの情報を漏らすほど軽率ではない。知らぬ存ぜぬで対応したと語った彼女に、リサは礼を言う。
「ありがとうございます」
「いいのよ～。リサちゃんが悪いことしてるわけじゃなし、堂々としてな！」
何でもないとばかりに手を左右に振って、おばさんは笑った。
「最近ってことは、マーケットだけで食材を揃えてるわけじゃないんですね」
「そうだろうね。ここは売り物の種類は多いけど、大量に買うのには向かないし、粉ものとか穀物類はあまり売ってないからね～。その辺はやっぱりアシュリー商会で仕入れているんじゃないかい？」
彼女はリサが選んだ果物を袋に詰めながら言う。
予想はしていたが、やはりそうかと思いつつ、リサは商品の詰まった紙袋を受け

取った。

その日の午後、リサはさっそくアシュリー商会へ向かった。

アシュリー商会にはカフェ・おむすびも常日頃からお世話になっている。代表を務めるアレクシスは、リサの養母であるアナスタシアの実兄でもあった。

リサは、カフェ・おむすびの担当であるシーゲルに話を聞こうとしたものの、生憎彼は地方に出張中だという。

日を改めようと思ったが、受付の女性がアレクシスなら時間が空いていると言うので、彼に聞くことにした。

「やあ、リサちゃんいらっしゃい」

執務室に通されたリサを、正面にある執務机の前に座っていたアレクシスが、立ち上がって迎えた。

そして部屋の中央に置かれたソファに座るようリサを促す。

「お忙しいところ、申し訳ありません」

ソファに向かい合って座ったアレクシスに、リサはぺこりと頭を下げる。

「いやいや。……今日来たのは、二十四区に出来た店のことを聞くためかい？」

リサが訪ねてきた理由を、アレクシスは予想していたようだ。

「そうです。アレクさんなら既にご存知かと思いますが、その『カフェ・お米』というお店がカフェ・おむすびの二号店だという噂があるんです」

「ああ、それは耳に入っているよ」

「やはりですか……まだ実害というほどではないですが、少しずつ影響が出始めて困ってるんです。製菓用の食材を取り扱ってるのはアシュリー商会くらいなので、シーゲルさんなら何か知ってるかなと思って来ました」

困り顔で話すリサを見ながら、アレクシスはふむ、と一つ頷いた。

「そのお店の店員らしき人物が、直営店で食材を購入しているという報告は来ている。どんな客であれ直営店で購入してもらう分には、こちらが断る理由はない。ただ、カフェ・おむすびのように直で卸すとなると話は別だけどね。そこのオーナーだという男が、僕は信用できないのだよ」

「オーナー、ですか？」

首を傾げたリサに、アレクシスは真剣な眼差しを向ける。

「ああ。オーナーは、ダグラス・デラニーという男だ。商人の間では、金を稼ぐためなら後ろ暗いことも平気でやると評判でね。ここ数年はフェリフォミア国内での噂はめっ

きり聞かなくなったから、他国で何かやっていたみたいだな。それが、わざわざ戻ってきて何をするかと思えば……」

アレクシスは吐き捨てるように言った。そのオーナーとやらは、よっぽど評判が良くないらしい。

「呆れるよりほかないが、リサちゃんたちが巻き込まれるのを見過ごすことは出来ない。おそらくだが、カフェ・おむすびの二号店という噂も奴が流した可能性が高い。そういうのが上手い男なんだ。僕も商売は綺麗ごとばかりじゃないと知っているが、奴のやり方は納得できない。昔、実害を被ったこともあるからね。だから、僕に出来ることなら協力は惜しまないよ」

全面的に味方すると言ってもらえて、リサはほっと胸を撫で下ろす。もしかしたら、『カフェ・お米』がアシュリー商会の顧客であるかもしれないと考えていたからだ。顧客であったならば、信用問題になるので、こうして話を聞くことも出来なかっただろう。

けれど、アシュリー商会の直営の店舗を一般客として利用しているのであれば話は別だ。商会が購入を拒否することは出来ないが、優遇する理由もない。

「常連さんや王都のお客さんの中には、二号店でないことを知っている人が増えています。けれど、地方や国外からのお客さんはそうじゃないので、『カフェ・お米』の評判

がうちの店のものと混同されてしまう可能性が高いんですよね」

「そうだね、広まってしまった噂は収束するまで時間がかかるし」

「はい。そこは長期戦になると覚悟しています。何より料理で負けるつもりはないので、きっとわかってもらえると思います」

「うん、僕もそう思う」

「それと、おそらくなんですが……そのお店はカフェ・おむすびのレシピを参考にしているような気がするんですよね」

「だろうね。たとえプロの料理人でも、何の知識もなくケーキを作るのは難しいからね」

「はい。それで、今までのレシピはもう仕方がないですが、新しいレシピを公開するのはしばらく控えさせてもらってもいいですか？」

「それはもちろん大丈夫だよ。カフェ・おむすびあってのレシピだし、店の運営に関わることだからね」

「ありがとうございます。あと私も、近々その店に行ってみようと思います」

「ええ!?　大丈夫かい？」

リサの言葉に驚くアレクシス。だが、リサとしては前から考えていたことだった。噂

を聞いたり人から話を聞いたりするより、実際にこの目で見てみるのが一番だと思うからだ。元の世界には、百聞は一見に如かず、という言葉がある。

「アレクさんの話を聞いて考えるに、相手はうちの店のことを他にも色々調べていると思います。私の顔も知られている可能性が高いので、変装していくつもりです」

「そうか……でも、充分に気を付けるんだよ」

「はい」

心配するアレクシスから色々と助言をもらい、リサはアシュリー商会を後にした。

第五章　潜入してみます！

今日はカフェの休業日。

カフェ・おむすびが休みの日でも『カフェ・お米』は営業しているという情報を聞き、リサたちは実際に行ってみようと計画していた。

「リサさんはやっぱり、その髪を隠さないとですね！」

「そうねぇ。珍しい色だし、リサさんの一番のチャームポイントだものね」

立ち読みサンプル
はここまで

カフェの二階にある、女子用の更衣室にしている部屋で、リサ、ヘレナ、オリヴィアの三人は変装用のグッズを広げていた。

アレクシスの話を聞く限り、おそらくカフェ・おむすびのメンバーの顔は、『カフェ・お米』の関係者に知られていると思われる。

堂々と行くことも考えたが、言いがかりをつけられる可能性を考え、念には念を入れて変装することにしたのだ。

変装して『カフェ・お米』に向かうのは、リサとヘレナの二人。

はじめはボディーガード的な役割を期待して、ジークを連れていこうとした。だがジークだと目立つ上に、今日彼は料理科の授業がある。

また、その店はイケメン店員目当ての女性客が多いので、いっそ女子だけで行った方が怪しまれないのではと思ったのだ。

それにしても、とリサは現在の状況を見て苦笑する。

目の前のヘレナとオリヴィアが、妙にウキウキしているのだ。目的は偵察なのだが、変装の方に力が入っているように見える。

かくいうリサ自身も、楽しくないわけではなかった。趣味でコスプレする人の気分というのは、こういうものなのだろうか。